

令和元年6月25日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01756

研究課題名（和文）「生活経験に基づいた実践的道德教育」を導く教育環境モデルの開発と検証

研究課題名（英文）Development and Validation of an Education Environment Model Leading to Practical Moral Education Based on Everyday Life Experiences

研究代表者

川崎 徳子（KAWASAKI, TOKUKO）

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：00555708

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：人が社会の中で生きていくということは、各個人の幸福を求めながらも、それを含めた人と人との関係を生きることになる。これらを支える社会性や道徳性の発達、人との関わりの中で、学習と環境に支えられ情動的認知的な発達とともに獲得されていく。大学生の意識調査から道徳教育で育まれたと自覚された道徳的価値判断とは別に、道徳性そのものは授業以外で育まれると認識されていることが示された。日本の社会における「同じ」が前提の環境には、多様な個別的背景をもつ人が共に生活する環境における「違う」が基本にある国際社会のような「違う」を感じる教育環境の必要性があり、実践的道德教育を導く教育環境モデルの可能性が導かれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学生の意識調査より、道徳の授業で学んだと自覚された道徳的価値観は、「敬愛と集団」/「友情と家族愛」、「平等」/「公平と命の尊さ」、「弱者へのいたわりとあやまちを正す勇氣」、「善悪」/「礼儀とルール」の3グループに分類されたが、道徳性については授業外で育まれると認識していることが示された。また、道徳教育への評価と幸福度との関連は高く、道徳教育に社会生活を営む上で必要な学びがあることを捉えた。また、実践的教育環境モデルとして、多様な個別的背景をもつ人が共に生活する「違う」が基本の集団で、個の自律性と集団への帰属意識が支える社会的役割と責任を能動的に自覚する体験が程よくあることの重要性が導かれた。

研究成果の概要（英文）：Living within society means that each individual's search for happiness must coexist with relationships with other people. The social and moral instincts which underpin these relationships are acquired through involvement with others, and in conjunction with emotional and cognitive growth gained from learning and the social environment. This survey of university students indicates that morality is nurtured and perceived outside of the classroom and is separate from moral value judgments learned through moral education or self-awareness. Feelings of "difference" between individuals are normal in international society due to the coexistence of people from a variety of backgrounds, however, the Japanese social environment has a presumption towards "similarity". For this reason, there is a need for Japan to develop an educational environment in which "difference" can be experienced, and which opens up the possibility of an environmental model for practical moral education.

研究分野：子ども学・保育学

キーワード：実践的道德教育 道徳性 教育環境モデル 違う 多様な個別的背景 個の自律性 社会的役割 責任

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

学習指導要領の改訂(平成30年3月)により、小学校では道徳が「特別な教科」として位置付けられた。しかし、その実践にあたって、履修の義務や検定教科書の使用など、教育内容を一元化することや評価についてなど、解決すべき課題は少なくない。そして「道徳心や倫理という一種の価値観を教育するべきなのか」など、根本的な問いも続いている。

これまで本研究チームは、幼小連携の道徳教育プログラムの開発に向けて、主に保育者の側の道徳的な心情と実践の中の対応の実態等を検討し、集団生活という環境の中で起こる他者との交渉、交換、調整などの場面では、当事者である子どもに、個々に臨機応変に対応せざるを得ない機会とともに、そこに道徳的判断を必要とする体験や子ども自身が道徳心を体系化する契機が生まれているという事例等を明らかにしてきた〔基盤(C)24531009〕。また、多様な個別的背景をもつ子どもを抱えるイギリスの初等教育施設の視察から、現行の授業時間という枠組みを切り出して道徳的な心情を考えることに加え、ハウス組織の取り組みなど生活体験を支える授業時間外の生活時間での道徳教育を育む環境の可能性を考えるという着想を得た。これらの異年齢、異質の背景をもつ個人が所属する集団での関係は、安心と夢中、共有と交換、交渉と調整といった場を保障し、他者の視点の内在化を促進すると考えられ、今後の道徳教育のあり方を考える一助に成り得ると捉えたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「生活経験に基づいた実践的道徳教育」を導く教育環境モデルの開発と検証である。道徳教育については概念的な理解や知識の習得に加え、実践的知恵の蓄積が必要であると考えられるが、授業を基盤とする現行の学校教育の枠組みでは、社会的な状況では十分に活かされていない。そこで生活の基盤を前提とした学校・学級の枠組みを超えた異年齢の集団の構成等、生活世界に密着した実践的道徳教育のための環境モデルの開発を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、現状の実態調査と環境構造の分析、解明、それを踏まえた教育実践のための環境モデル開発、さらには、環境モデルを含む道徳教育実践環境の評価の三段階で進めていった。

・異年齢集団システムに関する国内外の取り組みに対する調査研究:実態調査と基礎データ収集のフェイズを主として、国内外(日本・イギリス)での取り組みを詳察した。

・生活経験に基づいた道徳教育実践のための環境構造の分析・解明と環境モデル開発:調査研究のデータ分析を基に、生活経験と道徳教育実践を支える環境構造について理論を整理し、教育実践に向けての教育環境モデルについての構想を進めた。

・生活経験に基づいた実践的道徳教育のための教育環境モデルの取り組みと効果測定:異年齢環境モデルの実践から、効果測定の方法や存続可能な環境モデルの開発を思考した。

本研究を進めるにあたっては、Qualitative research(QR)、Statistics research(SR)とEducational Action(EA)の3つの班で、3つの研究フェイズを重ねながら進行していく形をとり、研究の各フェイズの研究成果を重層的掛け合わせながら検討を行った。

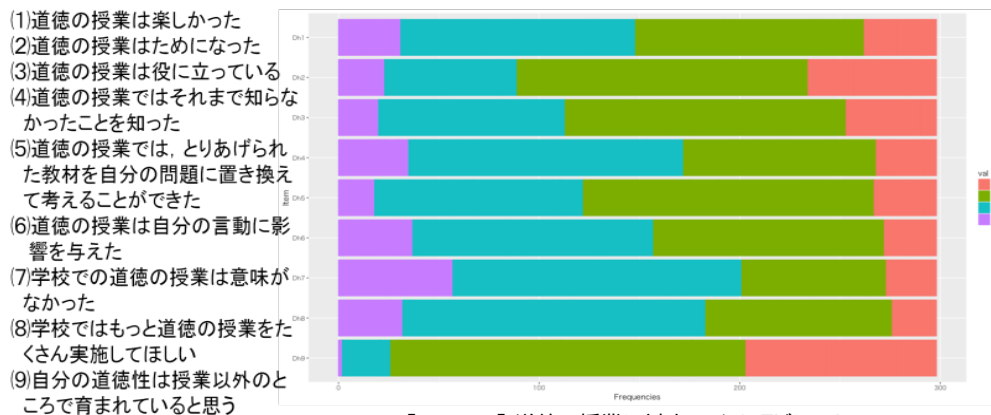
4. 研究成果

人が社会の中で生きていくということは、各個人の幸福を求めながらも、それも含めた社会の中での人と人との関係を生きていくことになる。こうした人との関係を支えていく社会性や、善悪の判断や正義、公正性など、社会的にも望ましい行動や態度、及びその判断を身に付けていく道徳性の発達、乳幼児期から始まる人との関わりの中で、学習と環境に支えられ情動的認知的な発達とともに獲得されていくものである。その育成には、家庭を基盤とする生育環境や学校教育における体験など、教育的環境に支えられるところが大きいと考えられる。その成果として、以下の4つ方向から整理した。

(1) 実践的道徳教育を導く教育環境について(学校教育の可能性を探る)

在学中の大学生を対象に質問紙による回想法で、道徳の授業で培われたものは何であるか、あるいは、現在の自分にどのように影響しているかなどを求め、これまでの学校教育でどのような道徳心が育成されているかについて、学生の経験的実感による道徳教育について、回想法で質問し、道徳の授業に対する学習の成果及び内容についての評価を求めた。具体的には、道徳の授業に対するイメージについて(9項目を4段階で評価)道徳の授業でどんなことを学んだか(項目選択、及び、自由記述、学習指導要領から抽出した12の内容項目)を回答、さらに、現在の生活との関連について、主観的幸福感度(伊藤裕子・相良純子・池田政子・川浦康至(2003)の主観的幸福感尺度15項目4段階で評価)の回答も得た。

これらの調査の結果、日本の学校教育における道徳教育について、大学生の印象評価としては、授業で学んだと思われるものが、「敬愛と集団」/「友情と家族愛」、「平等」/「公平と命の尊さ」、「弱者へのいたわりとあやまちを正す勇気」、「善悪」/「礼儀とルール」の3つのグループの内容の道徳的価値が自覚されおり、この学びが、社会性の基礎となる価値・判断につながっていると考えられる。しかし、大学生の多くは、道徳の授業をある程度評価はしていても、道徳性そのものは授業以外から育まると認識していることが示された。この結果は、実際の道徳性が育まれていると感じているのは、道徳の授業とは限らないという評価であり、実生活における実践的な面での経験の必要性があると考えられる。【Figure 1】



【Figure1】道徳の授業に対するイメージについて

また、道徳教育に対する評価の高い人は、幸福度も高いという評価も得られ、道徳の学びが、社会生活を営む上での必要な学びの効果としての期待が伺える。と同時に、逆の位置から眺めると、道徳教育の充実の方策が期待されることにもなる。こうした傾向も含め、道徳教育における今後のあり方を考える上での課題として示された。

(2) イギリスの初等教育施設における教育実践から整理する

イギリス地方にある初等教育施設でのフィールド調査、教員へのヒアリング調査(2013年調査〔基盤(C)24531009〕から2回目の訪問)より得られた知見を2つの側面からまとめる。

個別的な背景をもつ子どもが共に学ぶ教育環境と異年齢の子どもが交わる自治的組織での実践的能動的体験が支える個の自律性と集団での社会的役割と責任の自覚的体験のバランス

イギリスの政策や地域性も関係してはいるが、多様な個別的背景をもつ子どもと一緒に学び生活する日常が学校環境に存在している。ここでは、同年齢を基本とするクラス単位の学習環境における多様性の体験と、生活の基盤として所属するハウスへの帰属から、子どもの個別的背景に視点を置かない個人の存在感と集団での役割と責任を自覚しながら協働する生活体験を可能とする自治的組織としての体験がある。例えば、ハウス組織における個人での活躍が集団の成果となるような課題への取り組みの評価から、それらを全体で眺め合う機会によって、個々人の子どもの自律性を自覚する振り返りとともに、ハウスという集団での活動における役割と責任の自覚的体験をもたらし、まさに実践的道徳教育を含んでいることが伺えた。こうした様相から、個の自律性とある程度長期的に所属する集団での帰属意識が支える社会的役割と責任を能動的に自覚する体験が程よくあることの重要性を捉えたのである。

教師の能動性から自己実現を支える自由度のある学校組織の在り方とスクールマネジメント

調査を行ったイギリスの初等教育施設における教師の教育活動への意識を支えているものとして、伝統的な小学校では、その学校の特性でもあるが、ある程度、教師が能動的に自らの教育活動を遂行できる自由度が学校の組織の在り方として存在している様子が見られた。子どもの多様性等、学校環境には様々な課題を抱えながらも、Ofstedによる学校評価によって教育環境としての質的な保障への努力がなされているが、所属する教師の教育活動については、教師としての可能性を積極的に広げられる自由度があり、学校組織の柔軟なマネジメントの在り方を伴うものであることが伺えた。その結果、個々の教師の教育活動を通じた自己実現への可能性が開かれ、所属学校への愛校意識や帰属責任がもたらされていることも受け取れたのである。

Ofstedには、道徳的な教育に関する項目もあり、クラスを単位とする学習環境と子どもの所属するハウス組織での教育活動にも道徳教育的な要素に対する評価が積極的に含まれてくることが受け取られた。こうしたクラスでの学習場面とハウス組織がもたらす集団意識の中での実践的道徳教育を含む教育活動においては、かかわる教師の価値観や教育観、及び人間性など、教師の教育への姿勢が教育活動へ影響することを考える。教育活動への自由度の高い学校組織の在り方は、教師の能動性から教育実践への柔軟性を生み、より実践的道徳教育として望ましい教育環境への可能性が広がるのではないかと捉えたのである。

(3) 道徳性と他者視点について

国内外の初等教育施設での実態調査や事例検討などから、多様な国々の様々な背景をもつ人が共に生活する環境における「違う」ということが基本にある国際社会の現実と、日本の社会における「同じ」が前提の環境は、人との関わりにおけるそれぞれの豊かさとともに生きづらさに繋がる特異な状況を生む可能性があることが伺えた。これらは、自分にとって他者がどうい存在であるかという他者への意識の向け方や意識の持ち方、あるいは、他者の視点を人の発達においてどのように獲得するのかということに関連していることを示すものである。

そこで、研究者それぞれの領域から捉える、「他者視点」をKeywordに、社会の中の人のあり方を取り上げながら、他者視点やその獲得が社会の中に生きる人の発達にどう影響しているか、また、他者視点の獲得は、人の発達と環境とが関係する可能性としてどうあるのか等について検討した。

事例の検討より、以下のことが明らかになった。乳幼児期の子どもには、傍にいる大人が自分を見てくれていることを気にかけたり、確かめたりする姿が現れる。このやりとりは、他者

の視線の方向から視線を向けている他者の意識を感知していく過程の現れであり、この積み重ねは発達の必要な体験であるとも言える。ここには、自分とは「違う」他者を意識しながらも自分と「同じ」である人間であることを感じるという過程がある。情動的同調等にも見られるように「同じ」ように感じる感覚からその他者を信頼しながら自分とは「違う」他者に自分を投影して感じるという応答性を導きだす機会を創り出していく。人との関わりを支える他者を意識することが始まる乳幼児期から、こうした過程を保障することの必要性を考えるのである。また、様々な背景をもつ子どもと援助的な大人の関わりにおいても、子ども自身が関わる大人に自分自身を重ね合わせる経験を通じて、自分とは異なる 他者 の感覚や思いを理解していくようになる姿なども捉えられた。一方で、自分以外の他者への「思いやり」「道徳性」の発揮の前段階として、自分自身に対する無意識の配慮が必要であることや、他者視点の獲得の不全は自己意識の不全につながり、結果的に外側には「道徳性の未発達」に映ってしまうことなども検討された。

こうした私たちが獲得されたと思っている「他者視点」にも認知のバイアスは存在し、人との関係性における様々な生きづらさを生むことにも繋がっていることも見えてきた。また、私たちの生きている社会は、社会システムを維持するための原理やルールを抽象化した極限としての道徳性を教育するというやり方も用いているが、基本的に社会の要請と個人の動因は対立しうるものでもある。否応無く生じる葛藤をどのように解消するかについては、個人の内的なプロセスに委ねられており、この点から見ると道徳性として求められるのは不安定に対する耐性とも言え、社会生活は、それを培うための多様な価値観を習得する場であるとも考えられた。

これら発達における他者視点の獲得の課題は、他者との関係を生きる社会生活において、自発的に社会的にも望ましい行動や態度、及びその判断を身に付けていくことを支える道徳性の発達の基盤となるものであるが、この他者視点の獲得さえも生活場面での実践的な体験がもたらすものであることを捉えたのである。

(4) 多様な背景をもつ人が交わる教育環境モデルと実践的道徳教育について

生活経験に基づいた実践的道徳教育のための教育環境モデルの実験的取り組みと効果測定については、当初は研究協力校を定め、教育環境モデルを想定しての教育実践による検証を構想していたが、実際には、通常の教育活動を行っている学校へ新たな教育環境を提案し実施へと進めるまでには至らなかった。しかしながら、生活経験に基づいた実践的道徳教育のための教育環境モデルとして構想している教育環境と重なる実践的機会を捉えて、本研究の目的にもある教育環境モデルを構想するための教育環境として必要な要素を検討することを試みた。

イギリスの初等教育施設における異文化体験の授業実践においては、例えば、日本語について単語の発音と英語の発音が重なる単語を紹介し、イメージの共有から興味関心を引き出す活動など、言語的違いをイメージの共有からお互いの体験の重なりをつくることで、自らの体験的活動を導く異文化体験を導いた。その際、授業に参加した子どもたちの体験の中には、顕在的な意識では授業のその活動を遂行しながらも、言語の違いを越えて潜在的に他者を意識しながら、人間的理解に近づいていることの可能性などが捉えられたのである。

本研究の過程を経て、「生活経験に基づいた実践的道徳教育」を導く教育環境モデルとして導き出されたことは、以下の2点である。

一つ目は、大学生の意識調査より、学校教育における授業では、教材を媒介として考える道徳的観念から知識としての道徳性を得る機会が作られている。しかし、「同じ」を前提とする学級や学校文化が根ざしている学校教育における学習や生活環境における道徳教育では、様々な背景をもつ人が交わりあう「違う」が基本の社会的場面での道徳性を必然的に問われるような体験の場としてはその内容も限られてくる。例えば、現在の学校環境の「違う」を基本とする集団の活動には、縦割りの全校掃除や集会活動等があるが、実際には、所属集団を維持する期間が極めて限定的であり、集団の一員であることという帰属意識や集団を意識する前提である役割と責任などの意識を育てることに繋がる体験が保障できるとは言い難い。

そこで、社会生活における道徳性が問われる場面のような「違う」ことを基本とする集団の中で、「違う」が活かされながらも集団の力になるような個人の能動性を支える個の自律性と、社会的役割や責任を伴うような実践的体験活動の保障であり、また、それらの体験が相互に補償し合うような体験の往還性を生み出す環境である。「違う」が基本にある環境も、一方では、「違う」を意識しないような活動での没頭する体験やイメージの共有など、何かを媒介しての人的な共有感、連帯感等から他者を意識し、人間的理解を導くような協同体験場面の可能性が含まれると考える。

二つ目は、日本における学校教育の「同じ」を基本とする集団での意識は、互いを同じように感じることから進む乳幼児期の発達に見られるように、人間への信頼の基盤になり得るとも考えられる。「同じ」を基盤とすると、時にそれは「違う」ことへの意識を際立たせることも孕んでいるため、集団での人間関係では、これらが否定的にも働くことも想定される。しかし、「同じ」という意識が保たれた集団への信頼感のもと、「違う」を基盤とする教育環境での体験が加わることで、信頼感を基盤にした日本的な道徳性の獲得や社会性が育まれる可能性が生まれてくるのではないだろうか。

今後の検討課題とも言えるが、こうした実践的道徳教育を導く教育環境モデルについて、現在ある環境を工夫することから可能性を構想していくことが重要であると考えられる。例えば、イ

ギリスのハウス組織のように、個の自律性と長期的な所属集団における集団への帰属意識や社会的役割と責任などの社会的体験を保障するような教育環境の可能性として、学校を越えた地域における多様な人との関わりや社会的集団への所属意識を生む可能性のあるコミュニティスクール（学校運営協議会制度、地教行法第47条の6）等の取り組みがある。あるいは、現在の放課後児童クラブの在り方にもみられるように（登録児童数1234366人 2018年5月現在 厚生労働省 平成30年放課後児童健全育成事業の実施状況より）、多くの子どもが学校とは異なる新たな集団生活での体験を余儀なくされている。そこには、異年齢集団としての実践的な生活体験が見込まれ、ある程度長期的な社会的集団での道徳性の問われる体験の可能性が含まれている。その他、地域子育て支援拠点事業の実施要項（平成26年、厚生労働省）による活動や、地域遊び場づくりを提案する多様な活動団体の取り組み等においても、教育環境モデルが適用されるような環境づくりが期待される。

以上のように、各個人の道徳性の獲得についての実感を支えるのは、教科化された学校教育に位置づく道徳教育における学びと、社会生活が想定される「違い」の中で実践的学ぶ道徳性の二つが連動することが望ましいと捉えた。そして、生活経験に基づいた実践的道徳教育を求めるならば、これらをバランスよく体験する場とその体験が往還するような教育環境がモデルとして望まれると考えたのである。

最後に、教育環境評価と教育実践の評価測定については、試みとしての「違い」が想定される教育環境場面における実地授業についての分析に留まったが、新たなステージでの検討課題として今後の研究へとつなげていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 12件)

1. 川崎徳子 (2019) 日本における幼児期からの国際教育への課題と展望 幼児向け国際理解教育ワークショップの取り組みから考える - 山口大学教育学部研究論叢 68, 199-210 査読無
2. 遠藤野ゆり (2018) 自尊感情尺度の俎上にのらない若者に対する対話的支援の効果 - 学習・キャリア支援ボランティアの経験に基づいて - 生涯学習とキャリア 16(1), 187-199 査読無
3. 大塚類 (2018) 小学校における自尊感情の基盤の育成に関する現象学的事例研究: 学習支援ボランティアの経験に基づいて 人間性心理学研究 35(2), 131-142 査読有
4. 川崎徳子・小杉考司・小野史典・大石英史・遠藤野ゆり・大塚類 (2018) 日本人の社会性の発達を支える学校教育の可能性について 山口大学教育学部研究論叢 67, 39-43 査読無
5. 遠藤野ゆり (2018) 視線恐怖感を抱える青年期男性にとっての教室空間の生きづらさ「可能性」と「蓋然性」を手掛かりとした現象学的考察 人間性心理学研究 35-2, 143-154 査読有
6. 大塚類 (2018) 小学校における自尊感情の基盤の育成に関する現象学的事例研究 - 学習支援ボランティアの経験に基づいて 人間性心理学研究 35-2, 131-142 査読有
7. 石盛真徳・小杉考司・清水裕士・藤澤隆史・渡邊大・無藤杏里 (2017) マルチレベル構造方程式モデリングによる夫婦ペアデータへのアプローチ: 中年期の夫婦関係のあり方が夫婦関係満足度、家族の安定性、および主観的幸福感に及ぼす影響 実験社会心理学研究 56(2), 153-164 査読有
8. 本田志穂・石丸彩香・宇都宮沙紀・小田美憂・坂本和久・大江慶寛・小林仁美・有馬多久充・木寺碧・小杉考司 (2017) 日本人にとって道徳とはどのようなものとしてとらえられているか - 新しい道徳基盤尺度項目の開発を通じた検証 山口大学教育学部論叢 66, 95-106 査読無
9. 大塚類 (2017) 生きづらさの質的分析モデル構築 研究領域を横断する対話の場と協働に基づく『生きづらさ学』の構築 84-95 査読無
10. 川崎徳子 (2016) 子どもの葛藤、私の葛藤、保育の中の葛藤 幼児の教育 115, 9-12
11. 大濱知佳・永野駿太・小野史典 (2017) 思考抑制に与える代替思考の時間的要因の影響 日本感性工学会論文誌 16(2), 253-256 査読無
12. 遠藤野ゆり (2016) 「生きづらさ」の研究 ひと(他者)にわかってもらえないということ 看護教育 57(2), 138 - 144 査読無

〔学会発表〕(計 12件)

1. 川崎徳子・大塚類・遠藤野ゆり・小杉考司・小野史典 (2018) 自主シンポジウム「社会の中の人のあり方と他者視点の獲得を検討する A Multidisciplinary Approach to Facing Issues(発達, 教育臨床, 現象学, 認知, 社会心理)」日本乳幼児教育学会第28回大会
2. 遠藤野ゆり (2018) 「定時制高校における生徒間の「異質な他者」受容プロセスについて インクルーシブ教育の実現に向けた事例検討」 日本人間性心理学会第37回大会
3. 山内裕斗・小野史典 (2018) 視線に関する不快感情尺度の作成 九州心理学会第79回大会
4. Tokuko Kawasaki, Koji Kosugi, Fuminori Ono, Eiji Oishi, Noyuri Endo, Rui Otsuka, (2017) Concerning the potential for formal education to support the development of social skills in Japanese young people., Asian Association of Social Psychology, 2017.08.27, Auckland (New Zealand)
5. Koji Kosugi, Tokuko Kawasaki, Eiji Oishi, Fuminori Ono, Takashi Oshie, (2017) A study of basic skills which need to be included in career education programs at university., Asian Association of Social Psychology, 2017.08.28, Auckland (New Zealand)

6. 川端理子・小野史典 (2017) 公正世界信念の脅威が刑事事件の認知に及ぼす影響 日本心理学会第 81 回大会
7. Tokuko Kawasaki (2016) Observation of Responsive Interactions between Children and Childcare Workers at Japanese Kindergartens, 31st international Congress of Psychology ICP2016 July 24 - 29, 2016, Yokohama, Japan
8. Shiho Honda, Koji E. Kosugi, Sayaka Ishimaru, Saki Utsunomiya, Tomonari Yamane, Kazuhisa Sakamoto, Yoshihiro Ohe, Hitomi Kobayashi, Takumi Arima and Aoi Kidera, (2016) Development of a Japanese version of the Moral Foundation Questionnaire, International Congress of Psychology, 2016.7.27.
9. 川端理子・小野史典 (2016) 公正世界信念の脅威が被害者非難に与える影響 九州心理学会第 77 回大会
10. 山下健一・小野史典 (2016) 挫折体験による社会的知恵の獲得 九州心理学会第 77 回大会
11. Tokuko KAWASAKI and Koji E. KOSUGI (2015) Influence of kindergarten teachers' morality on educational programs, The 14th European Congress of Psychology. Ital, Milano,
12. Koji E. KOSUGI (2015) Three dimensional Field Model for individual preference. The 14th European Congress of Psychology. Ital, Milano,

〔図書〕(計 3 件)

1. 川崎徳子 (分筆) 無藤隆・堀越紀香・古賀松香・丹波さかの (編著) (2019) 光生館, 乳幼児教育・保育シリーズ「子ども理解と援助 - 子どもの育ち・学びを捉えて」第 1 章 保育の観察と記録, 24 - 30
2. 大塚類 (分筆) 小山真紀・相原雅代・船越高樹 (編著) (2019) ナカニシヤ出版, 生きづらさへの処方箋, 1. 私って過保護にされてる? 3-18
3. 川崎徳子 (分筆) 鈴木みゆき・吉永早苗・志民一成・島田由紀子 (編著) (2018) 光生館, 乳幼児教育・保育シリーズ「保育内容 表現」第 6 章 表現を深める - 文化へのつながり, 136 - 154

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川崎 徳子 (Kawasaki Tokuko)
山口大学 教育学部 准教授
研究者番号: 00555708

(2) 研究分担者

小杉 考司 (Kosugi Koji)
専修大学 人間科学部 教授
研究者番号: 60452629

大石 英史 (Oishi Eiji)
鹿児島大学大学院 臨床心理学研究科 教授
研究者番号: 80223717

遠藤 野ゆり (Endo Noyuri)
法政大学 キャリアデザイン学部 准教授
研究者番号: 20550932

大塚 類 (Otsuka Rui)
青山学院大学 教育人間科学部 准教授
研究者番号: 20635867

小野 史典 (Ono Fuminori)
山口大学 教育学部 准教授
研究者番号: 90549510

(3) 研究協力者

Senneck Andrew John
山口大学 教育学部 助教
研究者番号: 70769041

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。